論文

ロマンス諸語の converb について

―フランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語の比較・対照分析―

武本　雅嗣

1．はじめに

近年，通言語的研究において，主節に従属する副詞的準動詞は converb として論じられるようになっている[1]。基本的に，主動詞が定形なのに対して converb は非定形であり，たとえば英語の分詞構文の分詞も，日本語のテ形接続構文のテ形も converb とみなされる。英語で主として converb の役割を果たしているのは現在分詞であるが，ロマンス諸語では，それはラテン語の現在分詞に由来する非定形ではなく，動名詞に由来する非定形である。まず，よく見受けられる類の英語の分詞構文の実例とその翻訳をみてみよう[2]。

(1) a. ‘No,’ said Gatsby, **shaking** his head. (ENG: 141)
b. – Non, fit Gatsby **en secouant** la tête. (FRE: 146)
c. «Non è vero» disse Gatsby, **scuotendo** il capo. (ITA: 91)
d. －No－dijo Gatsby, **moviendo** la cabeza. (SPA: 67)
e. – Não – afirmou Gatsby, **sacudindo** a cabeça. (POR: 97)

(1) で英語の現在分詞に対応しているのは，フランス語ではジェロンディフ（gérondif），イタリア語ではジェルンディオ（gerundio），スペイン語ではヘルンディオ（gerundio），ポルトガル語ではジェルンディオ（gerúndio）（ブラジル・ポルトガル語の発音はジェルンヂオに近い）である。名称については，音韻・形態的交錯により，フランス語だけラテン語のゲルンディーウゥム（gerundivum）（動形容詞）に因んでいて，スペイン語とポルトガル語の場合伝統文法では「現在分詞」と呼ばれているが，機能的にはいずれもラテン語のゲルンディウム（gerundium）（動名詞）の奪格に由来する非定形である[3]。

しかしながら，次のように，これらのロマンス諸語の中ではフランス語だけ，英語同様現在分詞も converb 的に機能するし（(2b)の s’enquérant‘inquiring’），前置詞付き不定詞も英語の現在分詞やイタリア語・スペイン語・ポルトガル語のラテン語奪格動名詞に由来する非定形と同等の機能を担っている（(2b)の à aller‘to go’（文法的には‘in going’に相当））。

(2) a. […] he spent that time **going** from garage to garage thereabouts **inquiring** for a yellow car. (ENG: 171)
b. […] il avait employé ces trois heures **à aller** de garage en garage, **s’enquérant** d’une auto jaune. (FRE: 176)
c. […] avesse trascorso quelle ore **girando** di garage in garage nei dintorni, **chiedendo** di un'automobile gialla. (ITA: 111)
d. […] paso este tiempo **yendo** de taller en taller, por los alrededores, **preguntando** por un auto amarillo. (SPA: 81)

e. [...] ele tinha passado esse período **indo** de oficina em oficina, visitando todas as que conhecia na área e **indagando** sobre o automóvel amarelo. (POR: 116)

ただし，前置詞付きの非定形としては，次のようにイタリア語で奪格動名詞由来形が用いられるところで，スペイン語では‘al 不定詞’が，ポルトガル語では‘ao 不定詞’がよくみられる[4]。

(3) a. **Crossing** his lawn I saw that his front door was still open and he was leaning against a table in the hall, heavy with dejection or sleep. (ENG: 156)

b. **En traversant** sa pelouse, je m'aperçus que la porte d'entrée était restée ouverte. Je le trouvai dans la galerie, appuyé contre une table, lourd d'abattement et de sommeil. (FRE: 164)

c. **Attraversando** il prato vidi che la porta d'ingresso era ancora aperta; Gatsby era appoggiato a un tavolo dell'atrio, greve di avvilimento e di sonno. (ITA: 101)

d. **Al atravesar** el jardín vi que su puerta delantera estaba abierta aún y que él estaba recostado sobre una mesa en el vestíbulo, agobiado por la desesperanza o el sueño. (SPA: 75)

e. **Ao cruzar** o gramado, vi que a porta da frente ainda estava aberta e ele se apoiava com ambas as mãos em uma mesinha do corredor, exausto de depressão ou de sono. (POR: 107)

以上のような実例からは，イタリア語では同じ converb が英語同様あるいはそれ以上に幅広く用いられるのに対して，フランス語・スペイン語・ポルトガル語では種類の異なる converb が使い分けられていることがみてとれる。千数百年前に俗ラテン語から派生したロマンス諸語の間にはかなり共通性があるが，このような統語的・機能的相違も少なくない。ロマンス諸語の converb は，比較言語学・対照言語学的にたいへん興味深い問題を孕んでいる。本稿では，通時的および共時的視点をとって，とくにラテン語の現在分詞と奪格動名詞のプロトタイプ的用法がこれらのロマンス諸語にどのように継承されたのか分析し，ロマンス諸語における converb の形式的・機能的統合と細分化について論じる[5]。

2．ラテン語からロマンス諸語へ

英語では現在分詞と動名詞の語尾形態はまったく同じになっているが，ロマンス諸語ではそれらに対応する形態は明らかに異なっており，機能も言語によって違っている[6]。言語間の用語と機能の不一致が混乱を招くおそれがあるので，ここでロマンス諸語の非定形について整理しておくことにする。そのうえで，ラテン語から何がどう変わったのか，また変わらなかったのかを，形態論的・機能論的に分析して検証する。

2.1 形態論

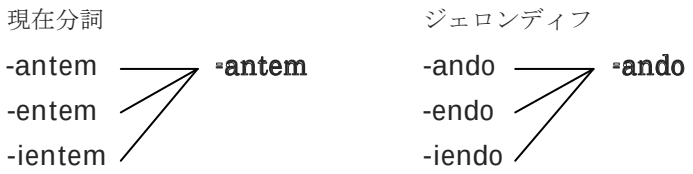
まず，例として，英語の singing と running に対応するラテン語の現在分詞・動名詞およびロマンス諸語のそれらの由来形とその名称を示す。なお，ラテン語に関しては，ロマンス諸語に受け継がれた形態，つまり現在分詞は男性・女性単数対格形，動名詞は中性単数奪格形を示す。また，両非定形の機能については括弧内に付す。

英語 sing	sing**ing**	現在分詞（形容詞的・副詞的）	sing**ing**	ジェランド（名詞的）
羅語 cantare	cant**antem**	現在分詞（形容詞的・副詞的）	cant**ando**	ゲルンディウム（副詞的）
伊語 cantare	cant**ante**	現在分詞（形容詞的），名詞	cant**ando**	ジェルンディオ（副詞的）
西語 cantar	cant**ante**	形容詞，名詞	cant**ando**	ヘルンディオ（副詞的）
葡語 cantar	cant**ante**	形容詞，名詞	cant**ando**	ジェルンディオ（副詞的）
仏語 chanter	chant**ant**	現在分詞（形容詞的・副詞的），形容詞	en chant**ant**	ジェロンディフ（副詞的）

英語 run	run**ning**	現在分詞（形容詞的・副詞的）	run**ning**	ジェランド（名詞的）
羅語 currere	curr**entem**	現在分詞（形容詞的・副詞的）	curr**endo**	ゲルンディウム（副詞的）
伊語 correre	corr**ente**	現在分詞（形容詞的），名詞	corr**endo**	ジェルンディオ（副詞的）
西語 correr	corr**ente**	形容詞，名詞	corr**iendo**	ヘルンディオ（副詞的）
葡語 correr	corr**ente**	形容詞，名詞	corr**endo**	ジェルンディオ（副詞的）
仏語 courir	cour**ant**	現在分詞（形容詞的・副詞的），形容詞	en cour**ant**	ジェロンディフ（副詞的）

これを見ると，形態的には，ロマンス諸語はいずれもラテン語から現在分詞と動名詞を引き継いでいるように思われるが，機能に関しては，動名詞由来形はラテン語の奪格動名詞からその本質的機能を受け継いでいるものの，現在分詞由来形のほうはスペイン語とポルトガル語では完全に形容詞や名詞になっており，イタリア語でもほとんど形容詞化・名詞化していることがわかる [7]。確かにラテン語でも現在分詞はしばしば形容詞的・名詞的に「～する（人）」の意で用いられていたが，フランス語以外のロマンス諸語では，それに由来する形態はその converb 的機能は継承していないのである。

語尾形態に関しては，これらのロマンス諸語の中ではフランス語だけラテン語の現在分詞に由来する非定形と動名詞に由来する非定形が同じになっているが，それは，フランス語の成立過程で，元は異形態であった両者に，古いイタリア語やスペイン語やポルトガル語では起こらなかった単純化が二段階で起こったからである（cf. Halmøy (2003a: 40)）。まず第一段階で，次のように，現在分詞の男女単数対格形の複数あった語尾形態と，動名詞の中性奪格形の同様に複数あった語尾形態が，圧倒的に数の多いタイプにそれぞれ単一化した。



次に第二段階で，単一形態になった現在分詞の語尾が弱音の消失によって -ant となり，そして同じく単一形態になったジェロンディフの語尾が語末母音の無音化および有声音の無声音化によって -ant となったため，両非定形の語尾は完全に同じになった。

現在分詞	ジェロンディフ
-antem > -ant	-ando > -ant

このような収斂を経て，出自の異なる現在分詞とジェロンディフは区別がつかなくなり，古フランス語では V-ant は前置詞 en を伴うことがさほど多くなかったため，機能的にも判然とせず混淆

しかける。次の (4) は 11 世紀末ごろの実例であるが，現代フランス語では en courant とされるところで curant となっていて，en は用いられていない。

(4) Desuz un pin i est alet **curant**, (*La Chanson de Roland*, 2357)
'Il est allé en courant sous un pin,' 'He ran beneath a pine tree,'

そこから，副詞的用法の場合に次第に'en V-ant'の形式が増えていき，15 世紀には今日と大差なくなり，17 世紀以降は，ジェロンディフと現在分詞は en の有無で完全に区別されるようになったのである（cf. Halmøy(2003a): 56-58）。

現在分詞	ジェロンディフ
-ant	-ant > **en -ant**

このように，学校文法で「en + 現在分詞」とされるジェロンディフは，実は「en + 奪格動名詞由来形」なのである。前置詞を伴うフランス語のジェロンディフは，文法書や先行研究ではフランス語に独特であるとされているが，このことについて渡邊(2011: 127)は，ラテン語およびロマンス諸語を含めて検証し，次のように指摘している。
「ジェロンディフは，つねに en がともなうことにより，現代においてはフランス語に独特であるといえる。しかし，機能的にみるならば，イタリア語における現在分詞とジェルンディオのように，フランス語における現在分詞とジェロンディフに類する弁別をもつ形態も存在するので，現在分詞とジェロンディフというふたつの形態をもっていることが，かならずしもフランス語に特異であるとはいえない。」
ここでは，この複合形式は突然変異形などではまったくないということを強調しておきたい。古いスペイン語にジェロンディフと同様の表現があったことは知られているが，奪格動名詞由来形が前置詞を伴う形式は，俗ラテン語からロマンス諸語に分化してから発生したものではない。その原型と目されるのは，ラテン語の'in 奪格動名詞'である。

(5) Praeclara laudatio, cum duabus in rebus legatorum una
shining speech when two.ABL. in things.ABL.PL. ambassador.GEN one
opera consumitur, **in laudando** atque **repetendo**
work deal.with.3SG.PASS. in praise.GER.ABL. and demand.back.GER.ABL
(Cicero: ACTIONIS IN C. UERREM SECUNDAE, LIBER SECUNDUS; cit. Schulte (2007))
'A noble panegyric; when the one business of the ambassadors is discharged by two operations, praising the man and demanding back what has been stolen by him'

Schulte (2007 : 89-90)によると，このような前置詞付き奪格動名詞は，主節に対して＜終結＞や＜同時＞の関係を明確にするために用いられ始めたのだが，前置詞付き不定詞ほどは多用されていなかった。そしてこの複合形はフランス語以外のロマンス諸語にまったく継承されなかったわけではない。確かに，スペイン語でもポルトガル語でも標準語では前置詞は付加されないが，かつてはそれぞれ今日'al 不定詞'，'ao 不定詞'が用いられるところで，'en ヘルンディオ'，'em ジェルンディオ'が使用されていた（cf. Butt (2011)，Lobo (2001)）。たとえば，17 世紀初頭に出版されたセルバンテスの『ドン・キホーテ』には，前置詞付きのヘルンディオがよくみられる。

(6) -No soy -respondí yo- casado; mas tengo dada la palabra de casarme **en llegando** allá.
(Cervantes, *Don Quijote de la Mancha*, Tomo 1, 397)
‘ “I am not married,” I replied, “but I have given my promise to marry on my arrival there.” ’

(7) **En llegando** el mancebo a ellos, les saludó con una voz desentonada y bronca, pero con mucha cortesía. (*Ibid.*, Tomo 1, 220)
‘Approaching them, the youth greeted them in a harsh and hoarse voice but with great courtesy.’

また，Lobo (2001) によると，ポルトガル語の方言では今なお‘em ジェルンディオ’が非常によく用いられ，＜仮定・条件＞＜時＞＜理由＞など多様な意味を表している。ガリシア語（ガリシア方言）ではさらに，この形式への主節と異なる主語の介入も可能なようである。この構造はフランス語のジェロンディフ構文ではあり得ない。

(8) a. A miña filla quedará só **en eu morrendo**. (Carré 1967: 162; cit. Lobo (2001)
'My daughter will be alone when I die.'
b. * Ma fille sera seule **en je mourant**.

ラテン語において奪格動名詞や前置詞付き不定詞ほどは用いられていなかった前置詞付き奪格動名詞に由来する複合形式は，標準的なスペイン語・ポルトガル語では廃れて古語法的または方言的になっているのに対して，フランス語では奪格動名詞に由来する単純形式を廃してその機能まで取り込むかたちで用法拡張し，ガリシア語ではさらに現在分詞的機能まで担うようになっていて，フランス語以上に用法が拡大しているのである。

フランス語では，廃した奪格動名詞の単純形と同じ形態の現在分詞がとくに文語で生き延びており，現在分詞とジェロンディフは用法が部分的に重なっているようにみえる。 それゆえ，両非定形の用 法上の相違・意味的相違が問題とされる。このことについては，とくに 3.1 と 3.2 で論じる。

2.2 機能論

次に機能についてだが，ロマンス諸語がラテン語の現在分詞および動名詞のどういう機能を受け継いでいるのか，実例をもとに確認しておく。

ラテン語の現在分詞は，修飾する名詞に応じて，主格・属格・与格・対格・奪格に格変化するが，フランス語の分詞構文で用いられる現在分詞に対応するのはその主格形である。次の (9a) は聖書の一節であるが，このようにラテン語の現在分詞は同格的に＜同時性＞を表していた [8]。対比のため，英語訳もあわせてフランス語訳とスペイン語訳を示す。

(9) a. Maria autem stabat ad monumentum foris **plorans** [...]
Maria but stand.3.S.IMP. at monument-SG.ACC. outside weep.PRE.P.
(LAT: *Biblia Sacra Vulgata*)
b. But Mary was standing outside at the tomb **weeping** [...] (ENG: *World English Bible*)
c. Marie se tenait près du tombeau, dehors, **pleurant**. (FRE: *Les Liver de Nouveau Testament*)
d. Pero María Magdalena estaba **llorando** fuera del sepulcro. (SPA: *Santa Biblia*)

(9a) のラテン語の現在分詞の箇所は，フランス語では (9c) のように，等位接続詞と定形動詞（et

pleurait）や前置詞句（tout en pleurs）で訳されている翻訳もあるが，英語と同じく現在分詞の使用も可能である。それに対して，現在分詞の本来の機能が消失しているスペイン語ではヘルンディオに変換されている。

また，ラテン語の現在分詞は＜継起＞用法も持っていた。同様に，聖書のラテン語とその英語訳・フランス語訳・スペイン語訳を示す。

(10) a. venit Maria Magdalene **adnuntians** discipulis quia
Come-3.S.PEF. Maria Magdalene announce-PRE.P. discples that
vidi Dominum [...]
see-1.S.PEF. Lord (LAT: *Biblia Sacra Vulgata*)

b. Mary Magdalene came **and told** the disciples that she had seen the Lord [...] (ENG: *World English Bible*)

c. Et Marie de Magdala vint **annoncer** aux disciples qu'elle avait vu le Seigneur [...] (FRE : *Les Livres de Nouvean Testament*)

d. Fué María Magdalena **dando** las nuevas á los discípulos de que había visto al Señor [...] (SPA : *Santa Biblia*)

(10a)のラテン語の現在分詞の箇所は，英語訳で等位接続詞と定形動詞が用いられ，フランス語訳で‘venir 不定詞’（英語の‘come to 不定詞’に相当）が使われていることから＜継起＞用法と考えられるが，ここでもスペイン語訳ではヘルンディオに置き換えられている。

このように，主節の事態に対して＜同時性＞や＜継起＞の関係を表すラテン語の現在分詞の用法は，他の様々な言語にもみられる converb としての現在分詞のプロトタイプ的用法であろう。ラテン語からフランス語への翻訳とスペイン語への翻訳を見比べると，フランス語はラテン語の現在分詞の本質的機能を保持しているのに対して，スペイン語は，ラテン語の現在分詞の形骸を残すのみとなったため，失った現在分詞の機能を，ラテン語の奪格動名詞由来形つまりヘルンディオによって補填しているということがわかる。ただし，ラテン語の現在分詞とフランス語の現在分詞の間にも相違点はある。(9a) や (10a) のようなラテン語の現在分詞は副詞的に機能しているように思われるが，格形態は主格形で，主語に性数一致することから，明らかに同格的，主語志向的である。それに対して，フランス語の converb 的な現在分詞は主語に性数一致して変化することはない。関係する名詞に応じて性・数・格変化するラテン語の現在分詞よりも不変化詞であるフランス語の現在分詞のほうがより converb 的であると言えよう。

一方，ラテン語の奪格動名詞のほうは，性数の関与しない中性形で，機能は完全に副詞的であり，そのプロトタイプ的用法は＜手段＞＜方法＞である。わかりやすい格言の例を挙げよう。(11) の動名詞 cadendo‘by falling’は名詞 vi‘by force’とともに奪格形で，単独で英語の by 句に相当している。

(11) Gutta cavat lapidem, non vi sed saepe **cadendo**. (LAT)
Drop-SUB.S. hollow-3.S.PRE stone- ACC.S. not force-ABL.S but often fall-GER.ABL.
‘The drop hollows the stone, not by force but by constant dripping.’

次の (12a) は欧米のいくつかの教育機関のモットーにもなっている格言であるが，ロマンス諸語への翻訳と対比させてみよう。

(12) a. **Docendo** discimus. (LAT)
teach-GER.ABL learn-1.PL.PRE.
'We learn by teaching.'
b. On apprend **en enseignant**. (FRE)
c. **Insegnando** impariamo. (ITA)
d. **Enseñando** aprendemos. (SPA)
e. **Ensenyant** aprenem. (CAT)

ラテン語の奪格動名詞は，フランス語だけは前置詞付き奪格動名詞に由来する複合形式になるが，他の言語ではそれに由来する単純形で訳される。(12e) のカタルーニャ語（Català）訳ではフランス語の現在分詞と同じ形態の -ant 形が用いられているが，これは，いわば前置詞を伴わない奪格動名詞由来形である。このように，ラテン語の奪格動名詞の機能は，ロマンス諸語の大多数でそれに由来する単純形に継承されているが，フランス語のように前置詞付き奪格動名詞に由来する複合形に受け継がれている言語もあるわけである。さらに，先ほどみたように，現在分詞の本質的機能を失ったイタリア語・スペイン語・ポルトガル語では奪格動名詞に由来する単純形が，喪失した現在分詞の converb 的機能つまり用法で言えば＜同時性＞＜継起＞まで担うようになっているのである。

ところで, 英語の動名詞とロマンス諸語の奪格動名詞由来形の機能がまったく異なっているのは, どちらもその名称はラテン語のゲルンディウム（gerundium）に因んでいるものの，英語のほうでは格はまったく関与的でないのに対して，ロマンス諸語では格機能が関与しているからである。英語の動名詞は主語にも目的語にも補語にもなりうるが, そもそもラテン語の動名詞には属格・与格・対格・奪格はあっても主格はなく，主語にはなりえなかった。たとえば，次の英語の格言は動名詞で表されているが，元のラテン語では不定詞が用いられており，やはりフランス語でも同じような構文をとると不定詞に頼るしかない。

(13) a. **Videre** est **credere**. (LAT)
b. **Seeing** is **believing**. (ENG)
c. { **Voir** / ***Voyant** }, c'est { **croire** / ***croyant** }. (FRE)

イタリア語やスペイン語などの奪格動名詞由来形は格機能を継承しているので，単なる動名詞ではなく単独で副詞的機能を持っているわけだが，フランス語のジェロンディフは，奪格動名詞に由来する単純形に取って代わった「前置詞付き奪格動名詞」に由来する複合形であり，全体として，ラテン語の奪格動名詞の機能を担っている。それゆえ，英語の動名詞の -ing 形とは異なり，フランス語の -ant 形は，前置詞 en なしではまったく機能しえないのである。

以上，本章では，ラテン語の現在分詞と奪格動名詞が，形態的・機能的にロマンス諸語にどのように継承されたのか考察を行った。そして，ラテン語の converb 的な現在分詞のプロトタイプ的用法つまり＜同時性＞＜継起＞の用法は，フランス語だけは現在分詞が受け継ぎ，他の言語では奪格動名詞由来形が引き受けており，一方，ラテン語の奪格動名詞のプロトタイプ的用法つまり＜手段＞＜方法＞の用法は，いずれの言語においてもその由来形が継承したことを明らかにした。また，フランス語のジェロンディフ‘en V-ant’は突然変異形ではなく，他の標準的ロマンス諸語では消失したものの方言には残存している，ラテン語の‘in 奪格動名詞’に端を発する形式であるというこ

と，そしてフランス語では逆に，奪格動名詞由来形の単独用法を廃し，その複合形が単純形の機能を取り込むかたちで用法拡張して主要な converb になったものであるということを指摘した。

3．言語間の共通点と相違点

本章では，現代ロマンス諸語の非定形の converb 的用法の拡張と制限について，構造と意味の関係を重視して対照分析を行う。

3.1　非定形の従属度の差と意味的相違

どのロマンス諸語においても，奪格動名詞由来形は主節への従属度が高く，主節の事態と密接に連動した＜手段＞＜方法＞や主節の事態に融合した＜様態＞を表す場合，言語によって多少差はあるが，(14b-e) や (15a-d) のように，概して主動詞を修飾する副詞のごとく主節に統合される。

(14) a. [...] Henry L. Palmetto who killed himself **by jumping** in front of a subway train in Times Square. (ENG : 68)
b. [...] Henry L. Palmetto qui se tua **en sautant** devant une rame du métro à la station de Times-Square. (FRE : 67)
c. [...] Henry L. Palmetto che si uccise **gettandosi** sotto un treno della metropolitana a Times Square. (ITA : 43)
d. [...] Henry L. Palmetto, que se suicidó **arrojándosele** al metro en Times Square. (SPA : 31)
e. [...] Henry L. Palmetto, que depois se suicidou **pulando** na frente de um trem do metrô na estação de Times Square. (POR; 46)

(15) a. [...] un magnifique coq sortît **en sautillant**. (FRE : 146)
b. [...] salió **dando saltitos** un magnífico gallo. (ITA : 99)
c. [...] saiu **saltitando** um galo magnífico. (SPA : 88)
d. [...] uscì **saltellando** un magnifico gallo. (POR: 100)
e. [...] a handsome cock came **hopping** out of his retreat in a dark corner. (ENG: 77)

それに対して，密接ではあるけれど非連動的な＜継起＞を表す場合には，概して主節に補足的に付加される。

(16) a. Then I went out of the room and down the marble steps into the rain**, leaving** them there together. (ENG: 103)
b. Puis je sortis de la pièce et descendis les marches de marbre sous la pluie**, les laissant** seuls ensemble. (FRE: 105)
c. Poi uscii dalla stanza e scesi i gradini di marmo nella pioggia**, lasciandoli** soli. (ITA: 66)
d. Entonces salí del cuarto, y bajé por las escalinatas de mármol para adentrarme en la lluvia**, dejándolos** a los dos solos en él. (SPA: 48)
e. Então saí da sala, desci pela escadaria de mármore e voltei para enfrentar a chuva**, deixando** os dois a sós. (POR: 71)

上記のような傾向は類像性の原理に基づく有意な傾向であり，ロマンス諸語のうちとくにフラン

ス語において顕著である。フランス語の場合，ジェロンディフは通常コンマ音調なく主節に統合されるのに対して，現在分詞は，前置詞化・副詞化している場合を除いて，コンマ音調を介して主節と結びつく。それゆえ，ジェロンディフは主動詞に係る副詞と同様に焦点的な要素になるのに対して，その前でインフォメーション・ユニットの切れる現在分詞のほうは非焦点的な補足的要素なのである。この構造的相違は両非定形の用法上の相違に関与している。ラテン語の奪格動名詞のプロトタイプ的用法である＜手段＞はジェロンディフで表され，ラテン語の現在分詞のプロトタイプ的用法である＜継起＞は現在分詞で表されるわけであるが，逆に言うと，通時的な観点からも機能論的な観点からも，＜手段＞用法はフランス語の現在分詞にもっともふさわしくなく，＜継起＞用法はジェロンディフにもっとも適さない[9]。

(17) a. On apprend **en enseignant**. (=(12b))
b. * On apprend, **enseignant**. （(17a) と同様の意味を表す文としては不適格）
(18) a. Paul s'endormit, **s'éveillant** trois heures plus tard.
b * Paul s'endormit **en s'éveillant** trois heures plus tard. (Rihs (2009))

(17b) は＜手段＞の解釈ができず，(18b) は＜継起＞の読みが不可能なので意味をなさない。問題は，ジェロンディフと現在分詞が＜同時性＞の用法を共有しているようにみえる点である。しかしながら，両非定形の間には，主節への従属度の違いによる大きな機能の違いがある。それが浮き彫りになるのは，主節が否定の場合である。

(19) a. Jean est allé à la gare **en courant** à toute vitesse.
b. Jean est allé à la gare, **courant** à toute vitesse.
(20) a. Jean n'est pas allé à la gare **en courant** à toute vitesse.
b. * Jean n'est pas allé à la gare, **courant** à toute vitesse.

従属度が高く主節に統合されるジェロンディフは主動詞を修飾する様態副詞並みに否定のスコープに入っているのに対して，主節への従属度が相対的に低く主節に組み込まれることのない現在分詞は否定のスコープに入っていないのである。

フランス語のジェロンディフと現在分詞の間にこのような機能的相違，従属度の差があることに着目すれば，意味の違いについても理解できる。似たような状況描写でありながら，非定形が使い分けられている事例をみてみよう。

(21) a. 'No,' said Gatsby**, shaking** his head. (ENG: 141)
b. – Non, fit Gatsby **en secouant** la tête. (FRE: 146)
c. «Non è vero» disse Gatsby**, scuotendo** il capo. (ITA: 91)
d. －No－dijo Gatsby**, moviendo** la cabeza. (SPA: 67)
e. – Não – afirmou Gatsby**, sacudindo** a cabeça. (POR: 97) (=(1))
(22) a. 'Klipspringer plays the piano,' said Gatsby**, cutting** him off. (ENG: 101)
b. – Klipspringer joue du piano, fit Gatsby**, l'interrompant**. (FRE: 103)
c. «Klipspringer sa suonare il piano» disse Gatsby **interrompendolo**. (ITA: 65)
d. – Klipspringer toca el piano dijo Gatsby**, interrumpiéndolo** –. (SPA: 47)
e. – Klipspringer toca piano－ disse Gatsby**, interrompendo** suas explicações. (POR: 70)

(21) と (22) を見比べると，英語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語はどちらの文でも同じ非定形が用いられているのに対して，フランス語だけ異なる非定形が使い分けられている。両方とも主節の事態と同時的な事態を表しているが，異なる形式には一連の事態の捉え方の相違，つまり意味的相違が反映している。フランス語では，(21a) の英語の現在分詞で表されている事態は主節の事態を反復的な継続アスペクトの中に包摂するように捉えられて (21b) のようにジェロンディフで表されているのに対して，(22a) の英語の現在分詞で表されている事態は主節の事態に対して瞬間的アスペクトによって先行または後続していると解釈されて (22b) のように現在分詞で表されている。＜手段＞＜方法＞＜様態＞を中心的用法とするジェロンディフは概念的に主節の事態と融合しているような事態を表すのに対して，＜同時性＞＜継起＞を中心的用法とする現在分詞は概念的にそれほど融合していない事態を表すのである。

3.2　不可欠な情報としての非定形

フランス語のジェロンディフは主節が状態を表す場合や主節の内容が希薄な場合には適さないのだが，本節では，ロマンス諸語におけるこのような主節の性質による非定形の使い分けについて考察する。

まず，主節が存在や姿勢を表す場合であるが，フランス語では，そのような状態を表す主節には前置詞付き不定詞‘à 不定詞’が統合されるか，もしくは現在分詞が付加される。

(23) a.　The old woman sat in the armchair **watching** TV.
　　b.　La vieille femme était assise dans le fauteuil { **à regarder** / , **regardant** / ***en regardant** } la télé.

このように主節が存在や姿勢を表す場合に前置詞付き不定詞が用いられる言語はフランス語だけではない。次のように，スペイン語やポルトガル語ではこの場合でも奪格動名詞由来形が使われるが，イタリア語では前置詞付き不定詞‘a 不定詞’が用いられる。

(24) a.　[…] but outside Gatsby's window it began to rain again so we stood in a row **looking** at the corrugated surface of the Sound.　(ENG: 99)
　　b.　[…] mais derrière les fenêtres de Gatsby la pluie se remit à tomber, si bien que nous restâmes plantés là, en rang, **à regarder** la surface ridée du détroit.　(FRE: 101)
　　c.　[…] ma ricominciò a piovere, così ci mettemmo tutti e tre in fila **a guardare** la superficie increspata dello stretto.　(ITA: 64)
　　d.　[…] pero en el exterior de la ventana de Gatsby había comenzado a llover de nuevo y nos quedamos sólo **viendo** la corrugada superficie del estuario.　(SPA: 46)
　　e.　[…] mas, pelas janelas, percebemos que estava começando a chover de novo, de modo que ficamos parados **contemplando** a superfície enrugada do Estreito. (POR: 69)

では，次に，単文としては成立しないほど主節の内容が希薄な場合をみてみよう。

(25) a.　The old woman spent the evening **watching** TV.
　　b.　La vieille femme a passé la soirée { **à regarder** / *, **regardant** / ***en regardant** } la télé.　(cf. (23b))

先ほどの (23b) の場合は，通常前置詞付き不定詞が用いられるが，主節が単独でも意味をなすので補足的に現在分詞を付加することもできるわけであるが，(25b) の場合は，主節は十分な情報を有していないため，補足的情報ではなく焦点的情報を必要とする。このような場合，フランス語では，インフォメーション・ユニットを切ることになる現在分詞は不適切なので，‘à 不定詞’に頼るしかないのである。しかしながら，イタリア語とポルトガル語では，次のようにジェルンディオも前置詞付き不定詞も用いられる。

(26) a. […] he spent that time **going** from garage to garage thereabouts inquiring for a yellow car. (ENG: 171)

b. […] il avait employé ces trois heures **à aller** de garage en garage, s'enquérant d'une auto jaune. (FRE: 176)

c. […] avesse trascorso quelle ore **girando** di garage in garage nei dintorni, chiedendo di un'automobile gialla. (ITA: 111)

d. […] paso este tiempo **yendo** de taller en taller, por los alrededores, preguntando por un auto amarillo. (SPA: 81)

e. [...] ele tinha passado esse período **indo** de oficina em oficina, visitando todas as que conhecia na área e indagando sobre o automóvel amarelo. (POR: 116)
(=(2))

(27) a. Quand on a passé son temps, comme Cottard, **à voir** des indicateurs possibles dans tous ceux de qui, pourtant, on recherchait la compagnie, on peut comprendre ce sentiment. (FRE : 200)

b. Quando si è passato il proprio tempo, come Cottard, **a veder** dei possibili informatori in tutti coloro di cui si vorrebbe cercar la compagnia, si può capire un tale sentimento. (ITA : 138)

c. Cuando uno se ha pasado los días, como Cottard**, viendo** posibles delatores en todos aquellos cuya compañía sin embargo buscaba, se puede comprender ese sentimiento. (SPA : 137)

d. Quando se passou o tempo, como Cottard, **a ver** indicadores possíveis em todos aqueles cuja companhia, contudo, se procurava, pode-se compreender esse sentimento. (POR : 114)

e. When one has spent one's days, as Cottard has**, seeing** a possible police spy in everyone, even in persons he feels drawn to, it's easy to understand this reaction. (ENG: 96)

ロマンス諸語において，英語の‘spend time (in) -ing’に対応する形式にどの非定形が結合するのかは微妙な問題であるが，コーパス調査およびインフォーマント調査の結果から，次のようになっていると指摘できる。つまり，フランス語では‘à 不定詞’しか用いられないが，スペイン語では逆に，ヘルンディオしか用いられない。そして，イタリア語では通常‘a 不定詞’が用いられるがジェルンディオの使用例も散見され，逆にポルトガル語では通常ジェルンディオだが‘a 不定詞’も可能なのである。わかりやすい例を示しておく。

(28) a. Jean a passé la soirée { **à lire** / ***en lisant** } un livre. (FRE)

b. Giovanni ha passato la serata { **a leggere** / **leggendo** } un libro. (ITA)

c. Juan pasó la noche { **leyendo** / ***a leer** } un libro. (SPA)

d. João passei a noite { **a ler** / **lendo** } um livro. (POR)

3.3 概念的定位機能の有無

さて，最後に，意味的相違がイタリア語では非明示的で，フランス語・スペイン語・ポルトガル語で明示的な事例を取り上げ，非定形の概念的定位機能について考察する。次の(29)と(30)の英語の原書では，同じ現在分詞 crossing が主節に前置されて用いられているのだが，その翻訳においては，イタリア語ではいずれもジェルンディオの attraversando で訳されているのに対して，フランス語では現在分詞 passant とジェロンディフ en traversant に，スペイン語ではヘルンディオ cruzando と前置詞付き不定詞 al atravesar に，ポルトガル語では同じくジェルンディオ cruzando と前置詞付き不定詞 ao cruzar に訳し分けられている。

(29) a. **Crossing** the porch where we had dined that June night three months before I came to a small rectangle of light which I guessed was the pantry window. (ENG: 155)

b. **Passant** par la véranda où nous avions dîné un soir de juin, trois mois plus tôt, j'arrivai devant un petit rectangle de lumière que je devinai être la fenêtre de l'office. (FRE: 162)

c. **Attraversando** la veranda dove avevamo cenato in quella sera di giugno, tre mesi prima, giunsi a un piccolo rettangolo di luce che pensai fosse la finestra della dispensa. (ITA: 100)

d. **Cruzando** el balcón donde habíamos cenado aquella noche de junio hacia tres meses, llegué a un pequeño rectángulo de luz que adiviné era la ventana de la despensa. (SPA: 74)

e. **Cruzando** o pórtico em que havíamos jantado naquela noite de junho, três meses antes, cheguei a um pequeno retângulo de luz que adivinhei ser a janela da copa. (POR: 106)

(30) a. **Crossing** his lawn I saw that his front door was still open and he was leaning against a table in the hall, heavy with dejection or sleep. (ENG: 156)

b. **En traversant** sa pelouse, je m'aperçus que la porte d'entrée était restée ouverte. Je le trouvai dans la galerie appuyé contre une table, lourd d'abattement et de sommeil. (FRE: 164)

c. **Attraversando** il prato vidi che la porta d'ingresso era ancora aperta; Gatsby era appoggiato a un tavolo dell'atrio, greve di avvilimento e di sonno. (ITA: 101)

d. **Al atravesar** el jardín vi que su puerta delantera estaba abierta aún y que él estaba recostado sobre una mesa en el vestíbulo, agobiado por la desesperanza o el sueño. (SPA: 75)

e. **Ao cruzar** o gramado, vi que a porta da frente ainda estava aberta e ele se apoiava com ambas as mãos em uma mesinha do corredor, exausto de depressão ou de sono. (POR: 107)

(=(3))

要するに，イタリア語以外のフランス語・スペイン語・ポルトガル語では，形式の違いが意味の違いを表しているわけである。そもそも，(29a)と(30a)の現在分詞の解釈は異なっている。つまり，前者は継起的な読みがなされるのに対して，後者は時間的定位と解釈される。それゆえ，フランス語では＜継起＞関係を表す現在分詞と＜時＞を表すジェロンディフが使い分けられているのである。ジェロンディフは，主節に後置統合された場合主節の事態と概念的に融合した事態を表すが，主節に前置された場合は前置詞の定位機能が活性化して，主節の事態を時間的または仮想的に定位する事態を表すことになる。それゆえ，(30b) のジェロンディフは，時を表す副詞節にパラフレイズできるような意味を表しているのである。そして，スペイン語・ポルトガル語でヘルンディオ・ジェルンディオと前置詞付き不定詞が使い分けられているのもまったく同様に異なる解釈がなされているからである。

ラテン語の‘in 奪格動名詞’から本質的機能を継承しているフランス語のジェロンディフには本来的に定位機能が備わっているが，ラテン語の奪格動名詞の単純形に由来するスペイン語のヘルンディオとポルトガル語のジェルンディオにはその機能はなく，ラテン語の‘in 奪格動名詞’に由来する複合形を廃したため，＜時＞や＜条件＞を表す場合，定位機能を持つ前置詞付き不定詞が用いられるようになっているのである[10]。一方，イタリア語のジェルンディオは，スペイン語のヘルンディオやポルトガル語のジェルンディオが持っていない概念的定位機能まで持っているように見受けられる。つまり，イタリア語のジェルンディオは，定位機能が制限されたスペイン語のヘルンディオやポルトガル語のジェルンディオ以上に機能が多様で，フランス語の現在分詞の converb 的機能とジェロンディフの機能をほとんどすべて持っているのである。ジェルンディオの用法が極めて広いイタリア語では，意味の違いが顕在的でないのに対して，異なる非定形を使い分けるフランス語とスペイン語・ポルトガル語では，事態の捉え方の違い，意味的相違がそこに反映しているのである。

4．まとめ

ロマンス諸語は，俗ラテン語から分化して個別言語に昇華していく過程で，様々な内的・外的要因によって，それぞれ独自に変化していった。ここで取り上げたような形態の単純化と細分化・再分化も，新しい言語が誕生する過程での言語の単純化・複雑化にかかわる自然な現象の１つであろう。ラテン語からの非定形の形態と機能の継承の仕方は言語によって様々であり，比較言語学的にも対照言語学的にも，いろいろ興味深い問題を含んでいた。converb の用法は非常に多様であるため，本稿ではすべての用法を網羅的に取り上げるのではなく，プロトタイプ的用法に絞って，ロマンス諸語の中でもとくにフランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語を比較・対照して論じた。通時的かつ共時的分析・考察をとおして，少なくとも主要な用法に関しては，あまりよくみえなかった言語間の共通点と相違点がかなり明確になったように思われる。以下にまとめておく。

① ラテン語の現在分詞の converb 的機能は，フランス語だけが現在分詞で継承しており，その機能を喪失したイタリア語・スペイン語・ポルトガル語では奪格動名詞由来形がそれを補填している。フランス語の現在分詞はラテン語のそれと同じく主節への従属度が比較的低く，そのプロトタイプ的用法も同じく＜同時性＞＜継起＞である。

② ラテン語の奪格動名詞のプロトタイプ的用法＜手段＞＜方法＞は，どのロマンス諸語にも奪格動名詞由来の単純形で受け継がれたが，フランス語では早い段階でラテン語の‘in 奪格動名詞’に由来する複合形が単純形に取って代わった。そのフランス語のジェロンディフの用法がもっとも制限的なのは，他のロマンス諸語とは違い，現在分詞が converb 的機能を保持しているからである。

③　単文としては成立しないような情報が不十分な主節に，焦点的情報として奪格動名詞由来の単純形または複合形が結合するか，それとも前置詞付き不定詞が結合するかは，言語によって異なっている。フランス語では‘à 不定詞’の使用が規則的なのに対して，スペイン語ではヘルンディオの使用が規則的になっている。そして，イタリア語では比較的‘a 不定詞’が優勢なのに対して，ポルトガル語ではジェルンディオのほうが優勢である。

④　主として概念的定位機能を担っていたラテン語の‘in 奪格動名詞’に由来するフランス語のジェロンディフは，主節に前置された場合その本来的機能が活性化するが，前置詞付き奪格動名詞由来形が廃れたスペイン語とポルトガル語では，それぞれヘルンディオとジェルンディオには定位機能がないため，代りに前置詞付き不定詞がその機能を担うようになっている。一方，イタリア語のジェルンディオは＜継起＞から＜概念的定位＞まで実に多様な用法を持っており，もっとも用法が拡張した converb である。

【注】

1)　日本語では「副動詞」という用語が充てられることがある。

2)　(1)(2)(3)(14)(16)(21)(22)(24)(26)(29)(30)の例文は【引用文献】に挙げた F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* の英語（ENG）原文およびフランス語（FRE）・イタリア語（ITA）・スペイン語（SPA）・ポルトガル語（POR）への翻訳の実例である。また，(15)(27)【注】5)(i)は Albert Camus の *La Peste* のフランス語原文およびイタリア語・スペイン語・ポルトガル語・英語への翻訳の実例である。なお，英語訳は参考のために付けておく。

3)　英語のジェランド（gerund）という用語もラテン語のゲルンディウム（gerundium）から来ている。

4)　スペイン語の al は a el ‘to / at the’ の，そしてポルトガル語の ao は a o ‘to / at the’ の縮約形である。

5)　また，次のように，移動や変化を表す非対格動詞の場合，英語では現在分詞や前置詞付き動名詞などが用いられるところで，ロマンス諸語では過去分詞形がとられることがあるが，過去分詞の用法の差はそれほど大きくないのでここでは取り上げないことにする。

(ⅰ) a.　**Venus** du silence de la ville empestée, les deux arrivants s’arrêtèrent, un peu étourdis. (FRE : 160)

b.　**Venuti** dal silenzio della città appestata, i due sopraggiunti si fermarono, un po' storditi.　(ITA : 109)

c.　**Venidos** del silencio de la ciudad apestada, los dos recién llegados se detuvieron un poco aturdidos.　(SPA: 109)

d.　**Recém-chegados** do silêncio da cidade infestada, os dois pararam, um pouco aturdidos. (POR: 92)

e.　**Coming** from the silence of the plague-bound town, the two newcomers were startled by the sudden burst of noise, and halted in the doorway.　(ENG: 76)

6)　英語では，古英語期にはそれぞれ -ende，-inge であった現在分詞と動名詞の語尾が，音韻的・形態的交差によって，15 世紀頃までに同一形態をとるようになった（cf. 中尾(1972): 164）。なお，この同化は，17 世紀以降の進行形の文法化を促したと考えられている。

7)　イタリア語では，前置詞句や副詞を伴って名詞を修飾する場合は，通常現在分詞ではなく関係詞節が用いられるようになっている。たとえば次のように，フランス語とは異なり，イタリア語では現在分詞を用いたパラフレイズは不自然である。

(ⅰ) a. la femme **qui marche** sous la pluie

b. la femme **marchant** sous la pluie

(ⅱ) a. la donna **che cammina** sotto la pioggia

b. ? la donna **camminante** sotto la pioggia

8) ラテン語の＜同時性＞の用法については渡邊(2011)も指摘している。

9) その情報量が多くなって情報として重要度が高まらない限り，現在分詞に手段の解釈はでてこない（cf. 武本(2006)）。また，時間的前後関係や概念的隔たりを前提とする「因果関係」をジェロンディフ構文が表しにくいのも，ジェロンディフの従属度の高さに起因していると考えられる。

10) 今回の調査では，スペイン語・ポルトガル語でも，解釈があいまいな場合はヘルンディオ・ジェルンディオで訳されている事例もわずかにあったが，明らかに＜時間的定位＞用法とみなされる場合には，すべて前置詞付き不定詞か，もしくは時を表す接続詞節に置き換えられていた。

【引用文献】

Camus, A. (1947): *La Peste*, édition électronique, Ebooks libres et gratuits (2011).

Camus, A. (1947): *La Peste*, traduzione di Benamino dal Fabro, RCS Libri S.p.A.: Milano (1997).

Camus, A. (1947): *La Peste*, Traducción: Rosa Chacel, Editorial Sur, S.A. (1995).

Camus, A. (1947): *A Peste*, Traducción: Rosa Chacel, Editorial Sur, S.A. (1995).

Camus, A. (1947): *The Plague*, translated by Stuart Gilbert, Vintage (1991)

Fitzgerald, F. S. (1925): *The Great Gatsby*, Wordsworth Editions Ltd (1999).

Fitzgerald, F. S. (1925): *Gatsby le Magnifique*, édition électronique, Ebooks libres et gratuits (2012).

Fitzgerald, F. S. (1925): *Il grande Gatsby*, traduzione di Fernanda Pivano, Oscar Mondadori (1988).

Fitzgerald, F. S. (1925): *El Gran Gatsby*, Librodot.

Fitzgerald, F. S. (1925): *O Grande Gatsby*, Tradução de William Lagos, Coleção L&PM Pocket, (2011).

Dufournet, J. (1993): *La Chanson de Roland : Edition bilingue français-ancien français*, Editions Flammarion.

Cervantes, M. (1992): *Don Quixote*, Translated by John Ormsby, An Electronic Classics Series Publication.

Divino, V.(2007) : *Santa Biblia-Reina Valera, Sosiedades Biblicas Unidas.*

Loisy, A.(1922) : *Les Livres du Nouveau Testament, traduit du grec en francais,* Paris, Émile Nourry.

Missions, R.(2000) : *World English Bible,* Rainbow Missions, Inc.

Weber, R. (1983) : *Biblia Sacra Vulgata,* Deutsche Bibelgesellschaft ;Ed. quartam emendatam edition.

【参考文献】

Arnavielle, T. (2003) : “Le participe, les formes en *–ant* : positions et propositions”, *Languages*, 149, 37-54.

Butt, J. (2011) : *A New Reference Grammar of Modern Spanish,* Routledge ; 5 edition.

De Carvalho, P. (2003): “«Gérondif», «participe présent» et «adjectif déverbal» en morphosyntaxe comparative”, *Langages*, 37 (149), 100-126.

Franckel, J.-J. (1989) : *Étude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Droz.

Gettrup, H. (1977): “Le gérondif, le participe présent et la notion de repère temporal”, *Revue Romane*, 12, 210-271.

Halmøy, O. (2003a) : *Le gérondif*, Ophrys.

Halmøy, O. (2003b) : “Les formes gérondives dans *Les .XV. joies de mariage* et autres textes du XVe siècle”, *Languages*, 149, 25-36.

春木 仁孝 (1991) : 「ジェロンディフ—現在分詞構文との比較—」, 『GALLIA』, 31, 大阪大学フランス語フランス文学会, 12-21,.

春木 仁孝 (1993) : 「ジェロンディフの複合形について」, 『フランス語学研究』, 27, 日本フランス語学会, 73-75.

Haspelmath, M. & KÖNIG, E. (1995): *Converbs in cross-linguistic perspective: Structure, and Meaning of Adverbial Verb Forms -Adverbial Participles, Gerunds-*, Berlin: Mouton de Gruyter.

Jasanoff, J. H. (2006): "The Origin of the Latin Gerund and Gerundive: A New Proposal", *Harvard Ukrainian Studies*, 28, 195-208.

Kindt, S. (1999): "En pleurs vs. en pleurant : deux analyses irréconciliables ?", *Travaux de linguistique*, 38, 109-118.

Kleiber, G. (2007): "En passant par le gérondif avec mes (gros) sabots", *Cahiers Chronos*, 19, 93-125.

Kleiber, G. (2008) : "Le gérondif : de la phrase au texte", In O. Bertrand et al. (eds), *Discours, diachronie, stylistique du français. Études en hommage à Bernard Combettes*. Berne : Peter Lang, 107-123.

Kleiber, G. (2009) : "Gérondif et relations de cohérence : le cas de la relation de Cause", *Recherches ACLIF : Actes du Séminaire de Didactique Universitaire*, 6, 9-24.

Kleiber, G. et A. Theissen (2006) : "Le gérondif comme marqueur de cohésion et de cohérence", In F. Calas (éd.), *Cohérence et discours*, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 173-184.

Lipsky, A. (2003) : "Pour une description sémantique et morpho-syntaxique du participe français et allemand", *Languages*, 149, 71-85.

Lobo, M. (2001) : "On gerund clauses of Portuguese dialects", in Alexandre Veiga, Víctor M. Longa & JoDee Anderson (eds.) *El Verbo. Entre el Léxico y la Gramática,* Ed. Tris Tram, Lugo, 107-118.

Rihs, Alain (2009): "Gérondif, participe présent et expression de la cause", *Nouveaux cahiers de linguistique française* 29, 197-214.

Rihs, Alain (2012): "A defence of the overlap criterion for distinguishing between the French gerund and present participle", *Building a bridge between linguistic communities of the Old and the New World. Current research in tense, aspect, mood and modality*, (Cahiers Chronos), In C.Nishida & C. Russi, Rodopi Bv Editions, 259-275.

Spang-Hanssen, E. (1973) : *Les prépositions incolores du français moderne*, Gads.

Schulte, K., 2007, *Prepositional infinitives in Romance. A usage-based approach to syntacic change*, Berne/Oxford, Peter Lang.

武本 雅嗣（2004）: 「ジェロンディフ構文の形式と意味」, 『仏語仏文学』, 31, 関西大学仏文学会, 125-143.

武本 雅嗣（2006）: 「フランス語の「原因」用法をめぐって―日本語のシテとの対照研究」, 『時制とその周辺領域の発展的研究』（科学研究費補助金 基盤研究（C）課題番号 20520441 研究成果報告書）, 61-70.

武本 雅嗣（2011）: 「英語の統合型現在分詞に対応するフランス語の非定形動詞について」, 『独仏文学』, 32, 山口大学独仏文学研究会, 107-116.

中尾 俊夫（1972）: 『英語史Ⅱ（英語学体系 8)』, 大修館, 東京.

Utida, M. (2002) : *Causal Relations and Clause Linkage: Consequential paticiple clauses and their use*, Osaka University Press.

渡邊 淳也（2011）: 「ジェロンディフと現在分詞について」, 『文藝言語研究・言語篇』, 60, 筑波大学, 121-181.

渡邊 淳也（2013）: 「主語不一致ジェロンディフについて」, 『文藝言語研究・言語篇』, 64, 筑波大学, 95-178.